

## 不登校生徒の学校イメージの変化を促進するための適応指導教室における援助

- 学校不信、教師不信からの回復の事例を通して -

高橋 さゆり

本間 恵美子

曾山 和彦

(横手市平鹿郡不登校適応指導「南かがやき教室」)(秋田大学教育文化学部)(秋田県教育庁特別支援教育課)

### 【目的】

適応指導教室は「県教委または市教委が、教育センターなどの施設において不登校児童生徒等を対象に学校生活への復帰を支援するためのカウンセリング、教科指導、集団生活への適応指導等を組織的、計画的に行う」場所である(文部省、2001)。ここに示されるように、適応指導教室の目的は公的には「学校復帰」である。しかし、各教室の指導員による報告書からは、「心の居場所」となることを目的とする記述が多い(河本、2002)。

本教室では、単に原籍校への学校復帰をめざすだけでなく、「心の居場所」を感じる集団づくりを行いながら、「学校復帰」、「社会復帰」をめざした援助を行っている。そのためには、不登校児童生徒が持つ学校イメージを肯定的なものへ変化させる援助が鍵を握っていると考えられる。

よって本研究では、学校不信、教師不信という否定的な学校イメージを持って適応指導教室に通級する不登校生徒に対し、肯定的な学校イメージに変化するための援助の在り方について検討する。

### 【方法】

#### 1. 対象生徒

中学3年生A子。小学校では友人関係に特に問題なし。中学校進学後、教室でのいじめがきっかけとなり不登校。不登校状態になった後の学校側の対応に傷つき、親子共々かなり強い学校不信、教師不信を抱くことになった。この時点ではA子と学校とのつながりはほぼ切れている状態であり、そのため、学校を介さず本教室への来級となった。

#### 2. 支援期間

200X年4月～200X+1年3月。

#### 3. 援助方針

- (1) 指導員とのリレーションづくり、通級する他の生徒たちとの集団体験を通して、対人関係の温かさ、嬉しさを十分に体験できるようにするところから援助を開始する。
- (2) A子と学校側をつなぐ支援を行う。ただし両者を直接つなぐことから始めるのではなく、指導員が間に立ち、段階を追って両者の距離を近づけるようつながりを促進する。
- (3) A子の持っている学校イメージが肯定的なものに変化する援助を行う。ただし、「学校を好きにならねばならない」という指導によるもので

はなく、体験を通してA子自身が学校イメージを変化できるようにする。

### 【結果】

#### 1. 第1期 200X年4月「生徒と指導員のリレーションづくり」の時期

A子は対人関係においてかなりの傷つき体験や不信を持っており、これが人全体への不信にならぬようゆっくり確実に不信を溶かす必要があった。そこで不登校になった原因探し、悪者づくり(～のせいでこうなった)の姿勢ではなく、A子が人とつきあうことの温かさやほっとした感じを十分に体験できることを目標とした。「この場(本教室)は安心できる場所」「私(A子)がいてもいい場所」と感じることでできる援助である。

指導員のかかわりは、「A子ちゃん」と名前を入れて会話をする、勉強など、子どもたちが個々に活動に取り組む際には隣に座る(A子に安心感を与えることに主眼を置き、ずっと「付き添う」形ではなく「寄り添う」形。隣で指導員は指導員の仕事をしているが、何かあったらすぐに対応できる関係)であった。同時に、他の通級生たちによるリレーションづくりも行われた。A子との出会いを喜び積極的に会話をする、トランプなど遊びを共有する、お弁当と一緒に食べる等である。

体験を通し居心地のよさを十分に感じた時点で、A子は自ら筆者の隣に座り、「私...、お弁当がこんなに楽しいものだとは思わなかった。」と、今、教室で温かな体験をしていることをきっかけに、気持ち語り始めた。不登校後、プリントは月に一度、(クラスの)自分の机の中にとまったものを取りに行っていたこと、行きたかった行事も終わってから知ることが多かったこと、「(まるで)私は忘れられているみたい」だったこと、「だから私は学校が大っきらい!担任も大っきらい!」と語り、赤色のボールペンで原籍校の名前を何度も消した。クラスメイトや教師に対するネガティブな感情を、自分から、自分の言葉で語るようになった。安心できる感覚の中で自分のネガティブな気持ちを表現し、そして整理し始めた時期である。

#### 2. 第2期 200X年5月「担任と指導員とのリレーションづくり」の時期

対人関係の心地よさの体験を積み重ねた結果、

A子は笑うことや大きな発声、友だちとの活動を楽しく展開できる等、プラスの変化が見られるようになった。この嬉しい変化を担任へ届けることは、A子と担任がつながる最初の一步にもなると考えた。ただしこれまでの対応から、A子に対して十分に対応しきれなかった担任の苦しさや後ろめたさ、抵抗へ配慮し、まずは教師自身に本教室とかかわることの温かさを感じてもらおうことを考えた。そこで、直接的な対応ではなく間接的な方法で、かつA子のプラスの変化は確実に伝えられる方法として、FAXによるやりとりを始めた。

< B先生へ Aさんは元気に過ごしています。表情がとてもよく笑顔が増えてきました。今も友だちといい表情で過ごしています。見ている私まで嬉しくなるくらいです。嬉しい気持ちのおすそわけでした。> というものである。これに対して、担任から「FAXありがとうございました！A子が元気にいてくれてすごく嬉しいです。教えていただいてありがとうございました！」と返信 FAXがあった。この用紙を手にA子呼びく「じゃーん、見て。」と渡した。じっくり見つめた後A子は、嬉しさを必死に隠した表情で「え～、担任から～？やだー。」と裏返しにした。

このように、指導員を介してA子と担任が間接的にかかわりを持てたことから、両者は抵抗や緊張からくる構えを持つことなくプラスの面を出し合うことになった。指導員は担任とのつながりをつくる時期であると同時に、A子と担任を間接的につなぐ役割を担った時期である。これは担任が、今後動き出すことができるようになるための援助でもあった。

### 3. 第3期 200X年7月「担任と指導員のリレーションを促進する」時期

間接的なつながりが積み重ねられてきた結果、A子にも担任にもプラスの変化が見え始めてきた。このような時期、担任から教室訪問したい意向の電話があった。これまでは指導員と担任が間接的なつながりをつくってきたが、訪問をきっかけに直接的なつながりに移行できること、そしてA子にも変化が起きてきていることから、担任の実際の姿や行動をA子の目に見える段階、ふれあう段階へと変化させることができると考えた。

最初、担任はかなり緊張した表情であったが、指導員により訪問をねぎらわれたこと、訪問もたらず意味を温かくフィードバックされたこと、指導員の声かけがきっかけでA子にお茶を出してもらったことの体験をすることになった。またA子にとっても、一瞬ではあったが担任と関わることができたという体験になった。第2期で、プラ

スに変化しそうになっていた学校イメージを、自分の目で確認し、修正していった時期である。

### 4. 第4期 200X年9月～12月「担任、生徒の間でのつながりづくり、つながりを見守る」時期

2学期には担任の教室訪問、FAX、電話の他、進路情報や連絡事項は、原籍校の同級生と同じ時期にきちんと届く関係ができあがった。これらの対応は、担任に対する不信を減らすことにつながるものとなった。以前に比べ、A子と担任が直接つながる部分も増え、かかわりの幅が広がりを見せた時期である。まだつながりが弱い部分（不安を相談する等）では積極的に指導員が両者をつなげる役を担うものの、両者でできることは見守る役割でかかわった。またこの時期、A子は週1回、原籍校の相談室登校ができるようになった。担任が生徒や部活の仲間働きかけをしてくれた結果、相談室にいるA子へ声かけに行く生徒たちもできた。担任が中心となり、学校でも成功体験を積み重ねられることになり、学校イメージを具体的に体験する時期になった。

### 5. 第5期 200X+1年3月「学校イメージの変化を確認する」時期

担任は皆と一緒に卒業式を願い、声かけをしてくれたが、A子は当日は参加しなかった。しかし翌日、見事合格した高校の合格通知を手に卒業証書を受け取りに学校へ足を運んだ。その後A子は、卒業証書と現像し立ての一人だけの卒業式の写真を抱え通級した。とても嬉しそうな表情で、「私のためだけに卒業式をやってくれた！」「先生、私はこの中学校の生徒でよかった！」と語っている。

学校は辛いこともあるけれど温かなところもあるところ - という思いに至り、原籍校だけでなく進学する高校にまでプラスの学校イメージを持つことになった。これまで作り上げてきた学校イメージをプラスの意味で再確認する時期であった。

#### 【考察】

学校は「嫌な場所」から、「嫌なことだけでなくいいところもある場所」というイメージに変化してきたことで、その後様々な課題に出会ったときに、A子自身が対応できる力を身につけることになった。学校イメージの変化は高校生になった現在もA子に大きな影響を与えている。学校イメージ変化の援助を考える際、どこからどのようにつながりを作っていくのか、担任をどのようにエンパワーメントしてアプローチできるのかが成功の鍵を握ると考える。

#### 【引用・参考文献】

河本肇 2002 適応指導教室の目的と援助活動に関する指導員の意識 カウンセリング研究 35,97-104